笠井 叡 *KASAI Akira*

笠井叡は1943年三重県で生まれた．裁判官であった厳格な父親，笠井寅雄の影響下で幼少時代を過ごすが，1954年9月26日の洞爺丸海難事故で父親を亡くす．キリスト教の洗礼は受けていないが，教会生活は長く，「イエスの復活」という歴史的事実は笠井にとって生涯のテーマといっていい．江口隆哉・宮操子のスタジオで学んだことでダンスの世界に入り，後に大野一雄に出会い，三年間，個人指導を受ける．1963年10月，朝日講堂で「犠儀」を踊ったことが遠因となって土方巽と出会い，1965年11月「バラ色ダンス―A LA MAISON DE M. CIVECAWA」（千日谷会場）に出演する．暗黒「舞踏」という用語は，笠井の発案を土方が採用したものである．1971年天使館設立，1979年から1985年までドイツに在住した．オイリュトミー，パントマイムも視野に入れ，狭い意味での「舞踏」に囚われない表現者である．

文章家としても高い評価を得ており，神秘性，精神性を重視する姿勢は，『天使論』，『聖霊舞踏』，『金鱗の鰓を取り置く術』，写真集『透明迷宮』ほか多数の著作として刊行されている．その範囲は，西洋神秘学から日本の大石凝真素美『真訓古事記』まで及び，その表現は，単なる日常言語を超えて「ダンス」にまで昇華されて，熱烈なファンを持つ著述家でもある．「大宇宙の音楽が聴こえる」（『聖霊舞踏』，p.9）あるいは「聖霊とはエネルギーであって，これなしに人は一瞬たりとも生きることができない」（『聖霊舞踏』，p.26）と笠井が述べる時，例えばジョン・デイヴィース（Sir John Davies，1569-1626）の詩に表れている―神羅万象を踊りとして捉える―ヨーロッパ前近代の《ダンス宇宙観》と通じ，現代日本を超えた宇宙性と歴史性を感じさせる舞踊家である．

笠井は『カラダと生命―超時代ダンス論』の冒頭で次のように述べる，「歴史というものが常に生きた存在として変化し続けている限り，どんな時代も一つの転換期です．けれども，一人の人間はすべての時代を生き続けているのではなく，ある特定の時代を生きているわけですから，自分が生きている時代そのものが，どのような転換期であるかをリアルに感じ取るためには，歴史全体を俯瞰することができるような，何らかの想像力を駆使しなければなりません」．この言葉に表れているように，笠井は，踊りにおいても，現代性，社会性を強く意識する．そして，2013年度「日本国憲法を踊る」で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞している．

（小菅隼人記）

主　催：慶應義塾大学教養研究センター日吉行事委員会（HAPP）
慶應義塾大学アート・センター
コーディネーター：小菅 隼人
問合せ：慶應義塾大学アート・センター
108-8345 東京都港区三田2-15-45　Tel 03-5427-1621

Contact: Keio University Art Center
Tel 03-5427-1621
E-mail ishimoto@art-c.keio.ac.jp